
待ってるから...

ペロコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

待ってるから…

【Nコード】

N8873C

【作者名】

ペロコ

【あらすじ】

タイトルは新蘭っぽいですが、中身は快青です。今までのうちの作品とは雰囲気というか話の流れが全く違いますのでご注意ください（念のため）。カテゴリに「シリアス」とありますが、うちの話にしてはというだけであり、全員一致でシリアスと判断できるかは分かりません。もっともそういった話を上手に書かれている作者様もいらっしやいますし、「そんな話でもどんと来い！」という方は読んでくれたら嬉しいです（*^_^*）

『怪盗キツドの仕事は月夜に行われる』と言い出したのは誰だったのか。

それは定かではないが、真実であることは違いなかった。

それゆえ、“月下の奇術師”なんていう異名もついているのだから。

そんな今宵も、月が輝く中、怪盗キツドは現れた。

警察を手玉にとり、楽々と逃げ果せた確保不能とまで言われるキツドは、いつものように中継地点で今夜の獲物を月に翳していた。

細く鋭い三日月を見ていると、悪魔が持っている鎌のように見えてきて、悪い事でも起こるような気がしてくる。

「今夜もハズレ、か……。まあ、いつものことだけだな。それにしても何か嫌な予感がする。何事もなく仕事も終わったんだけどさ。何なんだ？」

調べ終わった宝石を一瞬でどこかに消し去りながら、ブツブツと独り言を言う。

今日の仕事場から、程よく離れたビルの屋上に、夜には似合わない真っ白な衣装で一人凜とした気配で佇む怪盗が、次の瞬間感じた不穏な気配。

振り向けば、5、6人の全身黒尽くめの『客人』達の姿。

「これはこれは、お呼びしておりませんが、ようこそいらっしゃいました」

「宝石をよこせ」

「挨拶も無しですか。まあいいです。言っておきますが、これは貴方達の探しておられる物ではありませんでしたよ？ あ、それとも、貴方達から愛しの中森警部にお返し願えますか？」

「はっ。違うんなら用はねえ」

懐から銃を取り出し、

「さあ、何か言い残すことはあるか？ 最後だから聞いてやるよ」

どこかの三流ドラマのようなセリフを吐く男達に、キッドはトランプ銃を取り出し

「それはこちらのセリフですよ。最も、貴方達の最後は、刑務所ですがね」

ジャキンとトランプ銃を構えて言い放つ。

そして、まさに銃撃戦　とはいっても実弾を使うのは『客人』達
だけだが　が始まるうとした時、バン！！　と大きな音を立てて
屋上の扉が開き、

「快斗！！！」

この場で聞くことはありえない叫び声が響いた。

「なっ！！」

「誰だ！？」

一気に動揺が走る中、叫んだ主　青子は、キッドの方に向かってく
る。

「くっ………来るな！！！」

「何でもいいから、とにかく撃て！」

「来るんじゃないっ！！！」

パシユツ!!

……いと?!

「来るな!」

快斗!!

「来るな……って、アレ？ 青子？」

「どうしたの？ 大丈夫？」

「青子？ あお、こ……」

「だ**いぶ**魔まされてたみたいだけど、悪い夢でも見たの？」

「ゆめ？」

「うん、ずっと『来るな』って叫んでたよ？」

青子に言われ、ようやく落ち着いた。ここは、快斗の自宅であり、決してビルの屋上なんかではない。ただ、自分が夢を見ていただけだ。帰ってきてベッドに横になり、そのまま眠ってしまったようだ。

「よかった……夢で」

そう小さく呟き、そっと青子を引き寄せる。

「ちよっ……快斗!？」

「はは、悪い。もう大丈夫だから。シャワー浴びてくるわ。汗かいたし」

あの夢が現実なわけがない。今、この手で抱き締めた青子を喪うなんてことがあるはずがない。

それに……それに、青子がキッドの正体を知っているわけがない。

そう思い、安心して部屋を出てシャワーを浴びに行った。

だから、快斗は知らない。

青子が俯きながら言っていたことを。

かすかに涙を浮かべて、眩いていたことを。

「快斗……。青子はちゃんと快斗のこともキッドのことも受け止めるよ？ 心配しなくても大丈夫、なの、に……」

7

快斗は知らない。

自分が、キッドとして夢の中で言っていたことも口に出していたことを。

青子が、怪盗キッドは黒羽快斗であると確信していることを。

そして、伝えてくれるのをずっと待っているというのを。

(後書き)

こんにちは！ 違うネタが降りてきたペロコです。

「Calling」の後書きにてネタがないと言ったら、たくさんの方からリクエストをいただきまして、ありがとうございます！ ですが、どなたの希望でもない話という何ともいえない状態です。スイマセン。でも、リクエストいただいたものは、考えつつありますので、いつか形にできたらと思っております。

今回のお話の夢だった部分は、実は連載としてのプロローグとして使おうと思っていたんです。が、そんなシリアスな話を連載で書くなんてうちの能天気な頭では不可能と判断し、夢オチに決定(爆)今回も青子ちゃんは正体を知っています。ですが、快斗には知られていません。そんな設定も、ありえるのかも。青子ちゃん、気づいてるかもしれないね。

いつもよりも感想をいただくのが怖いのですが(シリアスなんて書いたことなかったし)、それでも感想をいただけたら嬉しいです。もちろん、不向きなのは分かりきっていることですので、「向いてないからもう書くな」と言われるまでもなく、もう書きませんので、そついった感想はできたらご遠慮下さい。

これからもよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8873c/>

待ってるから...

2010年11月5日07時14分発行